

心を育てる教育

奥津 春雄

ここ十年ほど、日本文学科の三年生を対象に、『伊勢物語』を教材として、国文学演習の授業を行っている。三条西家本の影印とその翻刻である岩波文庫を教科書とし、活字化された本文がすでに一つの解釈であると知ることから出発して、主体的な研究の姿勢とその方法を体験してもらおうとするのだが、成功することはあまり多くない。今、振り返ってみて、学習塾・予備校体制の弊害はかくも甚だしいものであったかと、改めて痛感する。

『伊勢物語』の魅力は、各段に描き出された人生の哀歎と、歌の味わい（一首の歌としての味わいと、その味わいが物語中でどう変るかということを含めて）にある。成立論や章段配列の問題も面白いが、始めて本格的に取り組む学生諸君にとっては、まだ先の問題である。そこで、まず、語釈・考証・通釈と、歌の解釈をし、次に、人間関係と事件の概要を整理して、主題を捉え、さらに、以上の経過の中で、各自の感じた疑問点や諸注釈の指摘する問題点を列挙して説明する……という三段階の発表をさせた。こうすれば、発表後、質問や討論を通じて、成立論や享受史など、興味ある話題に触れることもできるだろうという目論見であっ

た。

しかし、学生諸君にとって、これは至難の技であつたらしい。作業はいとわないので、多くの注釈書から抜粋して、膨大な資料は作るが、それだけのことで、作中人物への共感もないし、物語世界を納得のゆくイメージとして組み立てようとしてもしないから、疑問もわかない。「へしるよしして」は、領地があつたのでと訳します。「へ女」は二条の后を指します」などと、まことに気軽である。なかには、「主題はわかったのですが、問題点が見つからないので」と質問に来る学生もいる。自分は常に自分としてこちら側にあり、教材や参考書は、暗記し、活用術を学ぶ材料として向こう側にあるのである。これこそ、長年にわたる学習塾・予備校体制によって生み出された心の姿勢である。しかも、恐ろしいのは、私のクラスの学生で、予備校に行かなかつたものも多いという事実である。すでに、これらの諸君の親たちが、学習塾・予備校世代であり、働き盛りの教員の大方もそうである。だから、学生諸君は、家庭・学校・自身の環境のすべてから、戦後の経済性優先・能率第一の考え方を受け継いで育つたのである。

恐らく、こうしたことの結果、歌を味わい、鑑賞しようとする気持ちはたいへん薄い。歌には、一種言い難い鬱悶気があつて、それが余情として心に残るのだろうと思うが、そうしたことはないらしく、まるで心を閉ざしたように、「この歌は激しい恋の思いを歌っています」とさりとらうだけで、作者への共感はない。この諸君に『伊勢物語』を楽しんでもらうことは、実に困難なのである。子供時代に、遊び・喧嘩・家庭のしつけ・冒險など

の多様な生活があり、そこで心を揺さぶられたときの情感やイメージが蓄積されて、言葉を通して共感し合う媒体となるものであるのに、それが不足しているように思われる。

最近、心の教育ということがいわれる。それには全く賛成だが、それは教育技術の問題ではなく、大人を含めた社会のあり方の問題である。あの清新で好奇心に満ちた幼児期の心を、自然な姿で発達させ、豊かな人間性を見えるようになってもらうためには、学習塾・予備校体制は、百害あつて一利なしである。戦後五十年を転機として、経済性優先の価値観を見直し、自然保護とともに、人間の心の自然も保護すべきではないだろうか。

(徳島文理大学)

## 定時制高校の現場から

中島 正人

夜間の定時制高校に転動して三年目の春を迎えた。全校で百数十人の小さな学校に通ってくる生徒たちを取り巻く現実から学ぶことの多い日々を過ごしている。

「先生は昼間何やってんの？」と生徒によく聞かれる。ガソリンスタンドで働くA君の手は、油が染みついたたくましい手だ。プレス工場で働くB君に急な連絡で職場に電話した。電話の背後から大きな音が響いてきた。Cさんは「在日韓国人」、学校から帰

った後に深夜まで働いている。Dさんは、不登校で中学校にはほとんど行っていないかったという。この春に入学したEさんは、帰国した「中国に残された日本人」の二世だ。

教科書は無償、毎月の授業料は千二百円だが、給食費三千円を始め積立金やPTA会費など毎月七千五百円の学費(昨年度の一年生の場合)を彼らの多くは自分の稼ぎで払っている。その督促の仕事もクラス担任がしているが、強くは言えない場合が多い。

昨年度初めて一年生の担任をしたが、ここ数年では最も多い三十四人が入学したクラスから半数に近い生徒が三月までに退学していった。「事件」を機に退学に至った生徒の他に、身体的な問題で夜の学校が続けられなくなった生徒もいる。数字だけ見ればまったく異常だが、一人に一人にそれぞれの抱えてきた歴史があり、定時制高校に負わされた重すぎる役割がある。「いじめ」られた経験を話す生徒も多い。不登校の経験を持つ者も少なくない。

一年生ではクラスを二分割しての授業も多いので、十人前後の授業に「参加」できる喜びをもらす者も多い。彼らから知られる小学校や中学校、退学した学校の姿から考えさせられることも多い。生徒数が少ないこともあって、授業中も含めて彼らと雑談することが多いが、楽しい反面、カウンセラー的な役割を意識することも少なくない。職場や家庭で様々な問題を抱えていることがうかがわれてくる。

大学区制の受験制度によって「困難校」と呼ばざるを得なくな

つたある全日制高校から定時制高校に転動してみて、徹底的に序列化された「進学体制」の闇の深さを思い知らされた気がしている。

固く心を閉ざしていたように見えたDさんが、入学後一年あまりを経てゆっくりだが大きく変わってきた。まったく書けなかった作文に、自分の内面を書き出した。明るく返事ができるようになった。「癒されていく」ような生徒の姿を喜びに、夜の学校に通っている。「制服がない」「競争がない」学校で、自分自身が「自己の回復」をしているのかもしれない。

(愛知県立瀬戸窯業高校 定時制)

## 基礎学力をつけさせる試み

矢 作 健 輔

緑豊かな八王子の郊外にある中・高併設している私立学校に勤めてから、六年目の今年度、念願の中学一年生を教える機会に恵まれた。それまでは高校の授業が中心で、中三より下は教えたことがなく、顧問をしている中学女子バレー部の生徒以外とはほとんど関わりをもっていなかった。

本校は大学の付属校でありながら、推薦枠は学年生徒の約六割と決められており、残りの約四割の生徒は他大学の推薦受験、一般受験で進学へゆくことになっている。そんな学校の中学一年生

に対して、まず基礎学力をしっかりとつけさせてやりたい、という方針で臨んだ。

そこで一学期は学校に慣れるので精一杯な頃なので授業だけに集中させ、二学期から週一回の漢字テストと『読書ノート』を始め、三学期から『コラムノート』を始めていった。

漢字テストは『常用漢字学習字典』の中の熟語約百語を一週分の範囲とし、土曜の学活時にその中から十語を出題する五分間テストを行なう。中間・期末・学年末評価前までにそれぞれ五回行ない、評価にも十語出題する形式をとった。一学期は約五百語を範囲とし、評価ごとに出一題していったが、漢字テストを行なうようになり、漢字の部分の正答率が六割から八割に上がった。生徒も「テストがあるからやる」というのはよくないのだが、毎日少しずつ勉強するようになった。評価前にあわててやるより、毎週テストをしてしっかり覚えていくか確認していったほうがやりやすい。漢字は一生使うものだから、こういうふうによれば苦勞しないですむ」と、いかにも中一らしい真面目と甘えの混ざった感想を寄せている。

『読書ノート』は書名・著者名・出版社名・ページ数・読書期間・内容・感動した言葉、情景・疑問に思ったこと・感想などを記入する欄のあるB5のプリントをノートに貼って提出させた。冬季休暇課題(二冊)にした他は自由提出にした。読書を強制するのは逆効果だと考えたからである。それでも学年二百名のうち、約三十パーセントの者がよく提出してきた。二・三学期通しの統計だが、一人平均千二百七十五ページ読んだことになる。これは例

えは角川文庫の「坊っちゃん」でいうと約九冊分に相当する。中には毎日百ページ読んでいった者もいて、勉強との両立を心配したりもした。「読書は好きだが内容をまとめるのがおっくうで」「先生にとつてはくだらない本だと思われるかもしれないので」あまり提出しない者もいたようだが、「読書ノートがなかったら一冊も読まなかったような気がする。本を読めば読書ノートが書けるという気持ちがあったので、習慣になった」「自分の思ったことを記録して他の人に伝えるということはためになるし、いつまでも心に残る本になる」「内容や感想をまとめるのは難しかったが、普段から訓練しておく表現しやすくなる」「読解力や漢字の読み書きの力がついた」という前向きな感想が多かった。また、感想欄の余白に「自分が嫌いになるときがあるからこそ、その部分を反省し向上してゆき、欠点がなくなるのです。大いに悩んで心の美しい女性になろう」「すべての不幸や困難を空想(フアンタジー)のオブラートで包み込み、そう感じさせなくしてしまおう」の生き方。先生も感動しました。「戦争のない時代に生まれた人間は、戦争を二度と起さない義務がある。清太が節子の亡骸を焼くときの気持ちを忘れないで！」などとコメントを書いてやるのだが、「先生のコメントの部分を読むのが楽しみだった。ただもう少し入れてほしかった」という要望も出た。

「コラムノート」は冬季課題を含めて八回提出させた。新聞のコラム欄を毎日読み、その週で最も興味関心を引いたものを切り取り、プリントに貼る。プリントには、新聞の日付・意味調べ・難しい漢字と読み方・印象的な言葉・起承転結の段落分け(小見出しつき)・要旨(百字にまとめる)・表題・感想・意見を記入する欄のあるB5版のものである。これをノートに貼って提出させる。生徒の感想、意見の欄には、おもしろいものもあった。

「火災保険料が五十年ぶりに値上げするが、原因は阪神大震災とは関係なく、三年半前の台風19号だ」と紹介するコラムに対して、「原因はともかく、値上げの時期に意図があるのでは。阪神大震災のどきどきに紛れて値上げしたんだと思う。人々はいざというときのために高くても保険に入る。その辺の心理を上手く利用している。それでまた、少しずつ値段を下げていくと思う」というものだが根拠はないが、発想はいい。

また、「当節、ワープロを使えば短い時間に驚く量のプリントがつくれ、ガリ版時代の比ではない。子供に課せられるプリントの量は子供が考えるのに適した速度を超えている。先生はどんどん配れば仕事をしている気にもなるだろうが、昔より増えたはずの時間を有効に使っているのだろうか」というコラムに対して稚拙な教師批判もあった中、「電車・ファクスなど時間を短縮する道具ができて、人々はのんびりしているはずなのに、通勤中も仕事をしている人を見かける。大人たちは効率よくお金を得るために機械を発達させているのに、機械に使われ、お金を使う時間のゆとりがないように感じる」と書いてきている者もいた。「コラムノート」も「読書ノート」と同様、生徒の反応もよく、好評だった。

もちろんこれらの試みは、六年後には小論文試験を受験する者があることを念頭においてのことであり、また、三年後には受験

勉強を経験せずに高校へ上がれるため、教師側から意識的に働きかけないと、勉強に消極的な者が出、基礎体力の修得という点で不安があるということを考えてのことである。

生徒には負担になったという意識はなかったようだが、多少負担に思われても、中学一年生の向学心旺盛な時期に、言語に対する関心・知識、文章を読んで考え、表現する力をつけるための方法を教えられたのではないかと思っている。

授業をし、学活にゆき、担任・係分掌の業務をし、運動部顧問を持つ傍ら、漢字テストを採点し記録し、『読書ノート』に目を通しコメントを書き、『コラムノート』のコラムを読み段落分けをし添削をしコメントを書く。教師の負担はけっこうあったが……。

(明治大学附属中野八王子中学高校)

## 第十集（一九九〇年六月）目次

『源氏物語』の書かれた時代と

『源氏物語』に書かれた時代……………難波喜造  
『無名抄』における新教材の発掘(一)

……………小林保治  
五十嵐力の国文教育論に関する考察…浅田孝紀  
——国語読本の編纂まで——

\*……………\*

高等学校「現代語」の新設と

指導の在り方について……………北川茂治

〈実践報告〉

未知の世界へ……………政岡依子  
——帰国子女クラスでの古典学習における

導入の効果——

高校に於けるセミナーの授業……………佐々木啓之

〈教材研究〉

考察——走れメロス……………野田佐知子

〈現場からの報告〉

犬塚大蔵・猪之原総一

例会発表要旨